



# シーボルト『NIPPON』のフランス語版 - Voyage au Japon -

宮崎克則

## The French Version of Siebold 'NIPPON' - Voyage au Japon - Katsunori MIYAZAKI

九州大学総合研究博物館：〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1  
The Kyushu University Museum : Hakozaki6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581 Japan

### はじめに

1832年からオランダのライデンで自費出版された『NIPPON』は、オランダ語で刊行する約束だったが、ドイツ生まれのシーボルトはドイツ語で出した(1)。ドイツ語版からオランダ語版(第1分冊のみ)が出され、次いでフランス語版・ロシア語版も出る。ここでは、シーボルトが監修し、モンリーとフレシネが翻訳し、フランス王ルイ・フィリップの第1王子オルレアン公の援助を受けてパリのベルトラン社が刊行したフランス語版について検討する。

『NIPPON』フランス語版のタイトルは、『Voyage au Japon』に改題されている。ドイツ語版のタイトルは、「NIPPON」が主題で、副題として「日本およびその近隣諸国と保護国、すなわち南千島列島を含む蝦夷・樺太・朝鮮・琉球諸島に関する記録集」とあった。フランス語版の主題は「日本旅行」に変更されている。刊行の形式は、ドイツ語版と同じく分冊で出され、図版編は12分冊、本文編は1巻と5巻が出た。もともと図版編は20～22分冊、本文編は1～5巻を予定していたが、部分のみで終わっている。刊行年について、図版編の仮表紙には何も記されていないが、本文編1巻の内表紙に「M DCCC XXXVIII」(1838)、5巻に「M DCCC XL」(1840)とあることから、1838～1840年に刊行されたといわれている(2)。ドイツ語版は第1回配本が1832年、13回配本が1851年であり、その後1858～59年に「琉球諸島」等に関する部分が出ているので、フランス語版はドイツ語版の部分訳である。

図版編・本文編をセットで所蔵している機関は未調査であるが、図版編については未製本のシーボルト記念館(長崎)本を主体に、上智大学図書館本・ブランデンシュタイン城博物館本(シーボルト子孫のコンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン氏所蔵)を参照し、本文編は大英図書館本・東洋文庫本(ともに製本済み)を参照した。フランス語版については、1837年10月に出た予約募集書が残っているので、これを紹介しつつ『Voyage au Japon』の内容を復元しよう。これによって、シーボルトの『NIPPON』に関する出版方針も明らかにすることができよう。

### 〔注〕

(1) マティ・フォラー他『シーボルトと日本』、Hotei出版、Leiden、2000年

(2) ハンス・ケルナー(竹内精一訳)『シーボルト父子伝』163頁、創造社、1974年

## 1.1837年10月の予約募集書

昭和10年、当時の東京科学博物館において、ベルリンの日本学会が所蔵するシーボルト関係史料を主体に、国内の関係史料とともに「シーボルト資料展覧会」(4月20日~29日)が催された(1)。ベルリン日本学会所蔵史料は1年間ほど日本側に貸与され、その間に撮影が行われ、現在、フィルムは東洋文庫に所蔵されている(ドイツに返却された史料は、第2次世界大戦で焼失・破損した史料も少なくない。その一部がボフム大学図書館にある)。そのなかに1837年の予約募集書がある(2)。まず、全8ページにおよぶ募集書の翻訳文を掲載しよう。



【Voyage au Japonの予約募集書 表紙】 東洋文庫蔵

## 日本旅行

1823年から1830年の間に行われた

あるいは

日本・蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球列島などの自然・地理・歴史に関する記述

Ph. Fr. de Siebold(シーボルト)氏による

フランス語版

A.de Montry(モントリー)とE. Fraissinet(フレシネ)氏による作成

および

S. A. R. オルレアン公閣下の援助を受けて出版

8折版全5巻

一部彩色されている130枚の2折版図版集つき

案内書 1837年10月

日本国(1)は、旧世界の極東、危険な海の中に位置し、海によって外国の好奇心から守られてきた。そのことによって、長い間ほとんど知られることがなかった。

(1) 原住民の間では「ニッポン」と呼ばれる

16世紀の中葉にこの国を発見したポルトガル人の追放以来、オランダ人がそこで貿易を営む許可を得て保持し続けた唯一のヨーロッパ人である。そして、私たちがこの国に関する正確な情報を得ることができたのも専らオランダ人のおかげである。ケンペルとツンベルクは、オランダ東インド会社の医師の資格で、1人は1690～91年に、もう1人は1775～76年に日本を訪れた。しかし、この2人の旅行者は日本に短い期間しか滞在せず、取り上げた問題を十分に研究することはできなかった。その結果、ヨーロッパ人によって最近までに出版された日本に関する本の中には、不完全で間違っただけのものが多いのである。もっとも、彼らは原資料に当たってはいるのだが。

しかしながら、いくつかの欠落が、1779～84年まで出島商館長を務めたティツィングによって埋められた。ティツィングは、ある民族を知るにはその知的特徴と固有の生産物を研究するしかないと確信して、本やデッサンや地図を収集し、日本人の通訳にその翻訳を企てさせた。しかし、彼は残念ながら急性の病で命を落とす。ちょうどその時、彼は、パリで出版を予定した資料の整理に取り組んでいた。彼の収集品は完全に散逸し、原稿の全ても、アベル・レミュザとクラブロート氏の注意を引かなかつたら、同じ運命を辿っていただろう。両氏は原稿の一部を出版した。もし、クルーゼンシュテルン提督の下、1804年に長崎に来航したロシア大使の計画が成功していたら、この資料の喪失もおそらく償われていただろう。それでも、地理学については、この高名な船乗りによって多くのことが明らかにされている。ロシア大使付きの博物学者だったラングストルフとティレジウス氏は、その政治的地位が許す範囲で、日本の博物学と民族学を実り豊かなものにした。そしてついに、1811年千島列島で日本人によって捕らわれの身となったゴロウニン艦長は私たちに正確な情報を与えてくれた。それは、彼の科学に対する献身と彼が観察した国にともに名誉を与えるものだった。

これが現在までの日本に関する研究の概要である。先行研究の不十分さとこれから説明する出版の重要性を同時に理解してもらえるにはこれで十分である。

ケンペルとツンベルクのように、シーボルト氏は長崎のオランダ商館医師として日本に赴いた。しかし、彼はその2人の先駆者より幸運だった。ファン・デル・カペレン男爵は当時オランダ領インドの総督で、その行政はこの国に非常に誉れ高い記憶

を残しており、その彼がシーボルト氏を敬意を持って迎え入れていた。彼は、シーボルト氏に日本を調査するための必要な知識が全部備わっているのを見て、日本へ行くように勧めた。

シーボルト氏は1823～30年まで日本で7年を過ごした。彼は地理学・民族学そして自然科学の領域にわたる全てのものを入念に収集した。その幅広い知識、原住民の精神に巧みに入り込む特異な才能のおかげで、彼は知識や高い身分を持つ多くの日本人の好意と愛情を獲得した。日本人たちは、ヨーロッパ世界の端から来た1人の男が医学や植物学を教える時の熱心さに満足し、彼が全国から来た多くの病人に等しく治療したので、もっとも大きな熱意を示してシーボルト氏に惜しみない援助を与えた。すなわち、その科学研究において。また、彼らの歴史・宗教的教義・社会の状態・風習について知ることにおいて、手書き・印刷物・地図・デッサン・絵画・貨幣・花瓶・全ての種類の楽器・美術品・興味を引く新しいものが彼のものとなり、ヨーロッパでもっとも大きく貴重なコレクションを形成することができた(1)。

(1) オランダのライデにあるシーボルト氏の日本博物館はそれ以来全ヨーロッパ的な名声を博した。

このコレクションは、現在まで知られていなかった、日本の芸術が辿った歩みを知らせてくれる。このコレクションは、どの部分においても豊かで、この民族の知的で実践的な暮らしに関わる全てのものに生き生きとした光を投げかけている。コレクションを構成する部分には、「神道」という彼らの古くからある信仰のもっとも完全な観念を示すものがあり、これは6世紀頃、中国あるいは朝鮮から日本に渡来した「仏教」についても同様である。また他のものは彼らの歴史の初期を明らかにしているし、当時の彼らの進歩した文明を示すことによって、同じ時代の他の民族の社会の状態について興味の尽きない比較の要素を与えてくれる。

シーボルト氏のコレクションの一部をなす日本語の蔵書は、1500冊の印刷物あるいは手書きの本からなる。ヨーロッパの日本語蔵書を全部まとめてもこの数には及ばない。これらの書籍、日本人学者の協力のもとその場で集められた夥しい数のノート、彼が所有し、この目的のために集めた多くの物、それらのおかげで彼は日本国の完全で忠実な描写ができ、私たちの世紀(1)を例証するこの種のもっとも美しい企ての一つを実現することができた。そして、その企ての一つとは、未知の文明の見事な絵を私たちの目の前で繰り広げることである。故に、これほど新しく、科学にとってこれほど高い関心を有する作品をフランスで出版することが重要になっていた。

(1) ここにクラブロート氏が『日本王代一覧』という著作の中で、シーボルト氏の出版に関して述べた箇所がある。「この作品は、3分冊が出版されたが、この国に関する興味深く重要な情報に溢れている。その情報は内裏の年代記に含まれた多くの点を私よりうまく明らかにしてくれるだろう。それは私たちの世紀の最も大きく美しい企ての一つで、中世アジアのもっとも東洋的な部分を知らせることをその使命としている」1834年5月、序文、p.44

『日本旅行』の作成は著者自身によってモンロー氏に託された。モンロー氏がその協力者とともにこの重要な仕事を行うのは、著者との協力関係の下であり、いわば著者の目下である。この作品をこれまでに出版されたもっとも美しい本の一つにするために、芸術面から見ても、印刷面から見ても、疎かにされたものは何もない(1)。原文に付された多数の石版画は優れた芸術家によって作られた。そのうち、あるものはその場で描かれたデッサンをもとにしているし、あるものはシーボルト氏の博物館にある日本から持ち帰ったオリジナルをもとにしている。

(1) この旅行の第2部に関して私たちが出版する特別の案内書を参照のこと。内容は、①日本の植物誌、②日本の動物誌、③シーボルト氏による中国語・日本語・朝鮮語などの辞書(これらの作品は別々に販売される)

『日本旅行』は7部に分かれる。

- 第1部  
陸と海による旅行の物語、数学的自然地理学
- 第2部  
風習としきたり、政府の形態、法と行政
- 第3部  
神話・歴史・考古学・古銭学
- 第4部  
芸術・科学・言語と文学
- 第5部  
宗教と宗教制度、教義と哲学体系
- 第6部  
田舎と家庭の経済・産業・商業
- 第7部  
日本の従属国

### 予約の条件

この作品は20か22分冊で出版される。各分冊は、印刷されたカバーの中に収納され、6枚の図版を含む。1枚は彩色されている。本文は、他より便利なものとして採用した8折版で、半巻ごとに出版され、送料無料で予約購読者諸氏に配達される。半巻は、紙片がはがれる不都合を避けるために常に仮綴じが施される。本文の分冊は不定期に出版されるが、図版の最後の分冊がお手許に届く頃には全ての出版物が揃うようになっている。

図版集の分冊は定期的が続くが、頻度は徐々に少なくなる。そして私たちは早くも今日から、この出版にはいかなる遅延もないことを確約できる。各分冊は中国紙を使った本文と艶のある図版からなるが、その価格は予約購読者に対しては14フランからになる。艶のある上質紙に何冊かが刷られ、カラーの挿絵のために中国紙に2倍の挿絵が刷られる。各分冊の価格は28フラン。

予約は第5分冊が販売された時に厳格に締め切られる。出版時、各分冊は非予約購読者に対しては2フランの割増となる。本文の各半巻は半分冊のように支払われる。本文は、MM.Firmin Didot Freres(フィルマン・デイド兄弟)によって特別に鑄造された活字を用いて、最高品質で艶のあるぶどう版の紙に印刷される。図版はM.Lemercier(ルメルシエ)氏によって刷られる。彼は最高の石版画印刷者の一人であり、私たちは美しい出版物のいくつかを彼に負っている。

最初の2分冊は販売中である。  
それらは次のように構成されている。

- 第1分冊
- |      |                |
|------|----------------|
| 図版 2 | 長崎とその近郊        |
| 14   | 甲冑             |
| 19   | 妙義山の図          |
| 25   | 若い日本人女性、シモリの肖像 |

35 礼装(彩色図版)

96 花瓶と花かご

第2分冊

図版 3 日本全図

4 運送人、馬と駄獣

7 下関、タケサキ付近の図

31 郭成章の肖像

35 従者をつれた身分の高い日本人(彩色図版)

102 楽器

予約は、パリ

アルトゥ・ベルトラン出版社

地理学協会書店

オートフィーユ通り23番地

そしてフランスと外国の全ての書店で

フィルマン・デイド兄弟の活版印刷

ジャコブ通り56番地

この予約募集書には、シーボルト以前の日本研究者としてケンペル・ツンベルク・ティツィング・クルーゼンシュテルン・ゴロウニンらの名前がある。これら先行研究者について、辞書的にまとめる。

【ケンペル Kämpfer】(1651～1716)ドイツの医者、博物学者。レムゴーに牧師の子として生まれ、大学で医学・博物学を修めた。スウェーデンのペルシア派遣使節の書記として1683年から85年までペルシアに滞在、その国情を観察。その後、オランダ東インド会社の船医となり、バタビアに赴き、1690年(元禄3)に出島商館の医師として来日、92年10月まで滞在した。この間、91年と92年の2回、商館長の江戸参府に随行し、日本の歴史・社会・政治・宗教・動植物などを総合的に観察し記録した。得意な絵筆をとって挿絵も準備した。帰国後は故郷レムゴーの領主の侍医となり、かたわら著述に励み、1712年に出版された『廻国奇観』は西洋思想界に好評を博した。死後の1727年に出版された英語版『日本誌』はすぐにフランス語・オランダ語にも翻訳され、ヨーロッパにおける日本研究のバイブル的存在となる。

【ツンベルク Thunberg】(ツンベルグ、ツェンベリー、チュンベリーなどとも呼ばれる)(1743～1828)スウェーデンの博物学者。1761年ウプサラ大学に入学、医学と博物学を学ぶ。リンネの指導を受け、70年に医学博士となる。71年オランダ東インド会社の外科医としてオランダを出発し、ケープタウン・バタビアを経て、75年(安永4)8月長崎に着く。76年12月まで長崎出島に外科医として滞り、オランダ・ロンドンを経て、79年スウェーデンに帰国した。81年ウプサラ大学員外教授、84年教授、85年学長となる。日本では、植物の採集に努め、1776年(安永5)には商館長の江戸参府に随行、江戸では桂川甫周・中川淳庵らと医学や博物学の知識を交換しあった。帰国後の1784年に『日本植物誌』、1822～23年に『日本動物誌』などの博物誌を出し、旅行記として『ヨーロッパ・アジア・アフリカ紀行』(1788～93年)を出版した。旅行記のなかの第3・4巻が日本に関する部分であり、日本の地理や国民性・社会制度などについて記している(3)。

【ティツィング Titsingh】(ティチング、チチングなどとも呼ばれる)(1744頃～1812)オランダのアムステルダムに生まれ、1779年(安永8)～80年、1781年(天明11)～83年、1784年(天明4)の3回にわたって出島のオランダ商館長を勤め、1780・82年に江戸参府した。福知山藩主朽木昌綱・鹿児島藩主島津重豪らの大名と接触し、蘭学者では桂川甫周・中川淳庵、さらに長崎奉行久世広民やオランダ通詞吉雄幸作らと親交あり。離日後の1785年にベンガル長官、93年には大使として清国に至り乾隆帝に謁見した。1796年に退職してロンドンに移住し、ついでパリに移り、日本関係資料の整理・翻訳および執筆に努め、フランスの東洋学者レミュザ、クラブロートらと交流していたが、1812年に病没した。レミュザ、クラブロートらが遺稿をもとに校訂し、1820年『歴代将軍譜』(パリ刊、フランス語)、1822年『日本風俗図誌』(ロンドン刊、英語)、1834年に『日本王代一覽』(ロンドン・パリ刊、フランス語)などが刊行され、婚礼・葬式などの風俗習慣、日本史の他に田沼政権の対外政策、浅間山噴火などの同時代的な記事が紹介された(4)。

【クルーゼンシュテルン Krusenstern】(1770～1846)ロシアの提督・探検家・海洋学者。エストニアに生まれ、兵学校を卒業した後、イギリス海軍勤務を経て、アレクサンドル1世に進言しロシアとして初の世界周航を行った。1803(享和3)～06年(文化3)にナジェージダ号とネバ号を率い、大西洋・北西太平洋・オホーツク海・日本海・東シナ海を航海した。この間、各地の地理・水路・海洋・民俗などの調査をし報告書を残した。主著の『世界周航記』(5)は1809～13年にロシア政府の官費で印刷され、名著としてヨーロッパ各国語にも訳された。また、同船にはロシアの遣日使節のレザーノフ(Rezanov, 1764～1807)も同乗しており、仙台の漂流民津太夫らを伴い、1804年(文化1)に長崎に至り、半年間ほど滞り通商を求めたが、幕府から派遣された目付遠山景晋は通称拒否の返事を伝えた。レザーノフの日記は最近になって公開され、日本語訳も出ている(6)。

【ゴロヴニン Golovnin】(1776~1831)ロシアの海軍軍人。ゴロヴニンともいう。1807年からの世界周航の途上、千島列島南西部を調査するため南下し、1811年(文化8)国後島で部下7人とともに同島警備の幕吏に捕縛された。松前奉行の監視下に2年間にわたる拘禁生活を送り、13年に高田屋嘉兵衛らと交換に釈放された。この間、間宮林蔵の天文・測量などの諮問に応じ、また、幕府天文方の足立左内・馬場佐十郎にロシア語を教授した。ゴロヴニンが獄中で日本人の国民性を観察した『日本幽囚記』(7)は、1816年にロシア海軍印刷局から官費で出版。イギリス・フランス・ドイツ語に翻訳され版を重ねた。とくにイギリスでは数種の古典作品と並んで少年の読み物となったほどである。日本でも、オランダ語訳を手に入れた馬場佐十郎らにより1821年(文政4)から翻訳が始まり、本編12巻・付録2巻からなる『遭厄日本紀事』(高橋景保校閲)として25年に完成している。

予約募集書では、シーボルトによる研究が以上の成果をいかに凌駕しているかを強調し、クラブポートによる『NIPPON』書評を紹介しながら、本書が日本研究の決定版であるとしている。そして『Voyage au Japon』の具体的内容として、1~7章編成で20~22分冊であること(7章編成はドイツ語版『NIPPON』と同じ構成)、図版の各分冊には2折版の図6枚が含まれ、1枚の彩色図版が追加された。全体は20~22分冊というので、図版総数は募集書の最初にあるように、約130枚ほどとなる(実際は異なる)。本文編は8折版の小型で、半巻ごとに仮綴じて出され、送料無料という。本文編は付録的なものであり、メインは図版であった。その価格は意味不明な箇所もあるが、各分冊28フラン。予約は5分冊刊行時に締め切れ、以後は2フランの割増しとなった。本文編の印刷は当時のパリで有名なフィルマン・デイド兄弟によって、石版による図版編はルメルシエによって印刷された。そして、図版編の1・2分冊はすでにパリのベルトラン社から販売中であり、内容目次が記されている。

この予約募集書に記されている内容が、実際に出た『Voyage au Japon』と一致するのかどうか、各分冊ごとに検討していこう。

#### 〔注〕

- (1)日独文化協会・日本医史学会・東京科学博物館主催「シーボルト資料展覧会出品目録」、1935年
- (2)東洋文庫、番号(XVII-1-8-6.1-9)。慶応義塾大学三田メディアセンター貴重書室にも同じ予約募集書が所蔵されている。
- (3)ツユンベリー(高橋 文訳)『江戸参府随記』、平凡社、東洋文庫583、1994年
- (4)『ディチング日本風俗図誌』(異国叢書7、雄松堂、1970年)、横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本』(吉川弘文館、2005年)
- (5)『クルウゼンシュテルン日本紀行』上・下巻、異国叢書、雄松堂、1966年復刻版
- (6)レザーノフ『日本滞在記』、岩波文庫、2000年
- (7)ゴロヴニン『日本幽囚記』上・中・下巻、岩波文庫、1974年

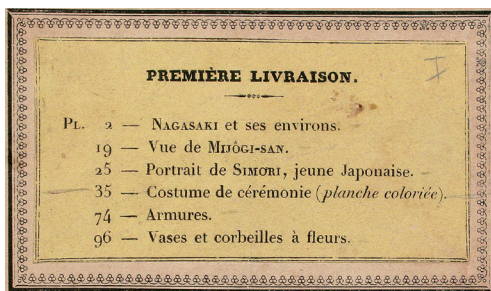


## 2.『Voyage au Japon』の復元

### (1) 図版 第1分冊

1837年の予約募集書が出たときすでに販売されていた第1分冊は、仮表紙のなかに1枚1枚バラバラの状態で図版が挟み込まれている。仮表紙には、募集書にもあったように、オルレアン公の援助、モンリーとフレシネの翻訳、ベルラン社刊、8折判の本文5巻、2折判の図版130枚とある。

第1分冊として配られた図版のタイトルは、黄色の紙に書いてある。これは別紙に印刷され、仮表紙の枠内に貼り付けられている。図版12分冊の仮表紙はすべて同じ形式であり、黄色の紙に記された図版タイトルが異なるのみである。これにあるタイトルと、予約募集書にあった第1分冊のタイトルを比べると、細かいことではあるが、[74-Armures]と[14-Armures]の図版番号を間違える単純ミスを犯している。



図版のタイトル

PREMIÈRE LIVRAISON.	
Pl. 2.	— NAGASAKI et ses environs.
14.	— Armures.
19.	— Vue de MIJŌGI-SAN.
25.	— Portrait de SIMORI, jeune Japonaise.
35.	— Costume de cérémonie ( <i>planche coloriée</i> ).
74.	— Armures.
96.	— Vases et corbeilles à fleurs.

予約募集書のタイトル

#### 【翻訳】 第1分冊

- 図版 2 —— 長崎とその近郊  
 19 —— 妙義山の図  
 25 —— 若い女性、しもりの肖像  
 35 —— 礼装(彩色図版)  
 74 —— 武器  
 96 —— 花瓶と花かご

図版の大きさをドイツ語版(縦59.5×横39.5cm)と比較すると、フランス語版(縦55.0×横36.0cm)の方が少し小さい。また、フランス語版にWatermarkはなく、ドイツ語版にあったオランダのファン・ヘルダー社透かし文字「VANGELDER」・「VG」はなく、別の紙が使用されている。そして、石版で印刷された無彩色の図版は、薄い紙に印刷されて貼り付けられている。カラー図版の場合は石版で印刷された後に手彩色されているが、無彩色図版はすべて薄紙に印刷され、台紙にマウントされている。これはフランス語版の特徴である。

第1分冊の図版は、長崎の港図をはじめ6種類、7枚が配られており、「礼装」にカラー版が添えられている。彩色について、ドイツ語版と比べて見ると、それほど大きな違いはなく、同じように手彩色されている(3)。これらフランス語版の第1分冊で配られた図版が、ドイツ語版では何回目の配本であるのか調べてみると、3～8回配本の図版に当たる(以下、フランス語版図版の上にドイツ語版での配本回数と、ドイツ語版『NIPPON』の日本語版-『シーボルト「日本」図録』1.2.3巻<雄松堂、1979年>-に掲載された通し番号を付している)。ドイツ語版の配本は、第1回が1832年、第7回が1839年であり、第8回配本の時期は不明であるが、早くとも1840年頃である(4)。つまり、予約募集書が出た1837年10月に販売されていたフランス語版第1分冊に、ドイツ語版の第8回配本(1840年頃)で配られる図版がすでに含まれているのである。このことについて、ドイツ語版の7回配本時(1839年10月)に添えられた「INHALT」(内容目次)をみると、配られた本文・図版のタイトルの他にシーボルトの報告が載っている(5)。その報告には、フランス語版が出たこと、7回配本が遅れてしまったことへのお詫び、「300枚以上の図版も

完成しています」とある。この記述はあながち誇張ではないと思われ、シーボルトはすでに完成していたドイツ語版の図版・石版をもとにフランス語版を作り、一部の図版はドイツ語版よりも早めに配本したと考えられる。

〔注〕

- (1) マティ・フォラー他『シーボルトと日本』、Hotei出版、Leiden、2000年
- (2) ハンス・ケルナー(竹内精一訳)『シーボルト父子伝』163頁、創造社、1974年
- (3) ドイツ語版『NIPPON』の彩色については、宮崎克則『シーボルト『NIPPON』の色つき図版』(九州大学総合研究博物館研究報告15号、2007年)
- (4) ドイツ語版『NIPPON』の配本については、宮崎克則『復元:シーボルト『NIPPON』の配本』(九州大学総合研究博物館研究報告3号、2005年)
- (5) 九州大学付属図書館医学分館所蔵の未製本『NIPPON』には、1回配本から13回配本の「INHALT」がすべて揃っている。

〔付 記〕

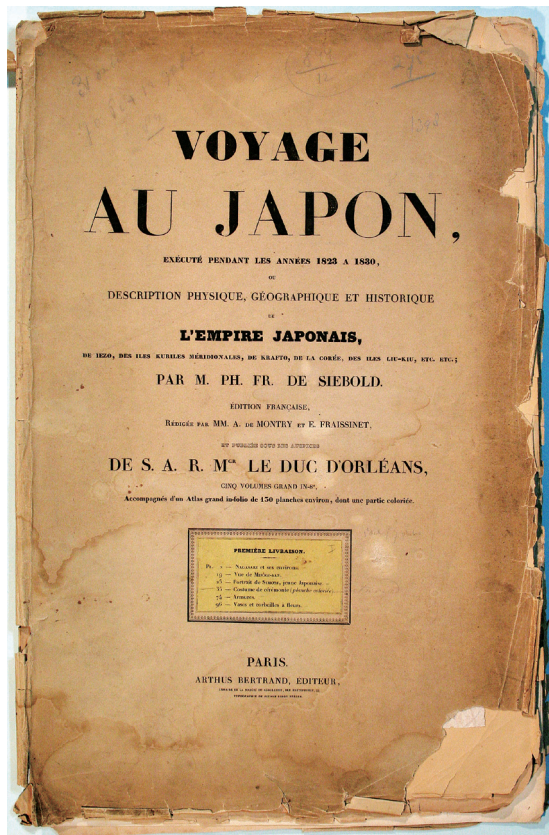
ドイツ語版の左上にある「NIPPON1」は「VOYAGE AU JAPON」へ、右上にあった「TAB.I」は、「PLANCHE」の図版番号に変更されている。そして、ドイツ語版の下部にある「Buntsiu japon.pinx」(谷文晁『名山図譜』が原画)、「L.Nader in lap delin」(ナードル石版画)はフランス語版にもそのままあり、出版社「Arthus Bertrand, Editeur」(アルトゥ・ベルトラン社刊)、図版印刷者「Imp. de Lemereier」(ルメルシエ印刷)が追加されている。これらはすべてのフランス語図版に共通しており、白黒図版は薄い紙に印刷されて台紙に貼り付けられている。彩色図版の場合は、ドイツ語版と同じように石版で印刷された後、手彩色されている。



【Voyage au Japon】第1分冊

ドイツ語版の配本  
回数と通し番号

[126] (8回配本)

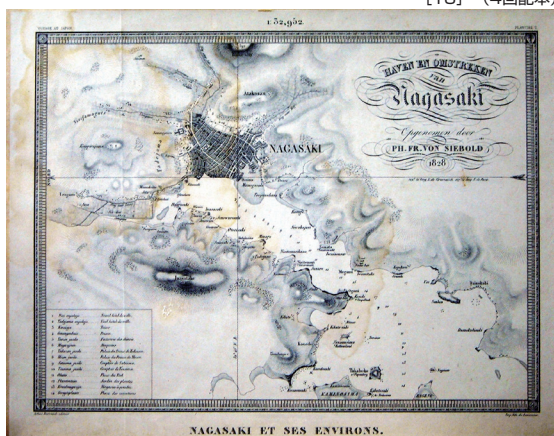


仮表紙



35 礼装

[13] (4回配本)



2 長崎とその近郊

[15] (6回配本)



19 妙義山の図

[36] (3回配本)



25 しもりの肖像

[126] (8回配本)



35 礼装

[57] (7回配本)



74 武器

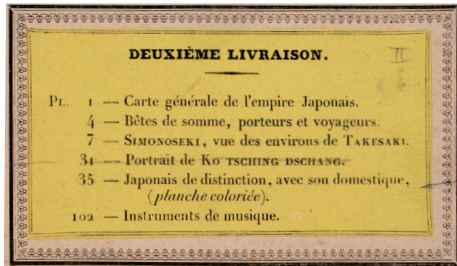
[233] (7回配本)



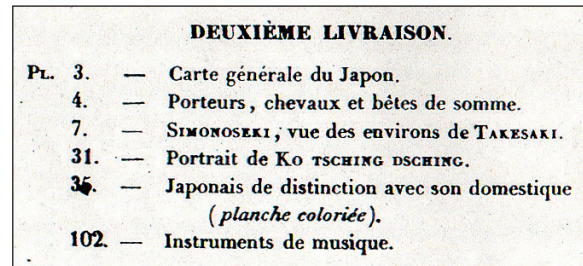
96 花瓶と花かご

## (2) 図版 第2分冊

第2分冊も予約募集書が出た1837年10月には販売されていた。実際に配本された第2分冊の仮表紙に貼られたタイトルと、予約募集書にあるタイトルを比べると、第1分冊と同じく異なっており、[1-Carte générale de l'empire Japonais]と[3-Carte générale du Japon]とあるように、図版番号だけでなくタイトルも少し違っている。



図版のタイトル



予約募集書のタイトル

### 【翻訳】 第2分冊

- 図版 1 —— 日本帝国図  
 4 —— 荷役用家畜・配達人・旅人  
 5 —— 下関、竹崎付近  
 31 —— 郭成章の肖像  
 35 —— 従者を連れた身分の高い日本人(彩色図版)  
 102 —— 楽器

配られた図版の枚数は、6種類7枚であり、「従者を連れた身分の高い日本人」に彩色がある。彩色の仕方は、ドイツ語版とほぼ同じであり、大きな相違はない。このなかの「日本帝国図」は、シーボルトが幕府天文方の高橋景保からもらった「日本辺界略図」のことであり、ドイツ語版第1回配本で配られたメインの図版である。細部を比較してみる。日本および周辺図の部分とはともに同一であるが(京都を通る経線に「NORD」が追加)、下部にあるタイトルは、フランス語版用に変更され、左下に「Arthur Bertrand Editeur」(アルトゥ・ベルラン社刊)・「Imp.de Lemercier」(ルメルシエ印刷)が付け加えられ、上部左側にはフランス語版のタイトル「VOYAGE AU JAPON」があり、右側には図版番号「PLANCHE 1」が付け加えられている。こうした変更はすべてのフランス語図版に共通しており、中心となる絵の部分はドイツ語版と同じであるが、周囲にあるタイトルなどのみを変更されている。

石版による印刷は1798年に完成された技術であり、原版に凹凸をつけることなく、クレヨンなどで描けば化学反応で原版を作ることができた。高純度の石灰石に脂肪性のクレヨンやインクなどで絵を描き、次に弱酸性溶液(アラビアゴムと硝酸の混合液)を塗る。化学反応によって描かれた部分は油性物質を強く引きつける力を持ち、描かれていない部分は水分を保持する。こうして石版上に水分を弾く部分と保持する部分ができる。石版を水で湿らせたのち、印刷用の油性インクを乗せると、絵を描いた部分にのみインクは付着し、その他の部分ではインクが弾かれる。そして紙を当て刷り機にかけるのである(1)。この手法では、石版に描かれた絵の一部を書き直し、再び印刷することは可能であるので(2)、フランス語版の図版は新たに石版を作って印刷したのではなく、タイトルなどのみをフランス語版用に変更してドイツ語版で使った石版を再利用していると考えてよい(新たに石版を作った絵もある。後述)。なお、シーボルト記念館本では[31 郭成章の肖像]が欠けているので、上智大学図書館本から補った。

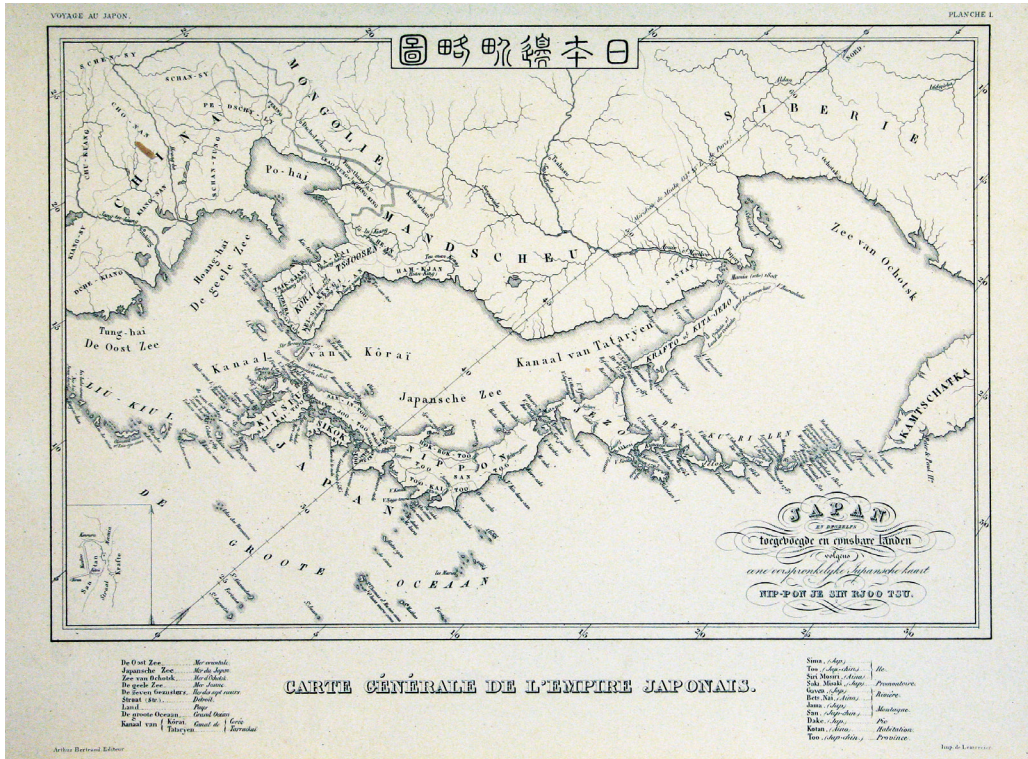
### 【注】

(1) 町田市立国際版画美術館編『版画の技法と表現』、町田市立国際版画美術館発行、2003年改訂第2版

(2) 町田市立国際版画美術館佐川美智子氏のご教示による。

【Voyage au Japon】第2分冊

[1] (1回配本)

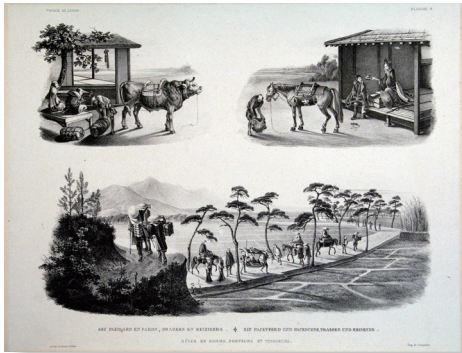


(フランス語版) 1 日本帝国図(日本境界略図)



(ドイツ語版) 日本境界略図 九大本

[90] (5回配本)



4 荷役用家畜・配達人・旅人

[102] (5回配本)



5 下関、竹崎付近

[128] (8回配本)



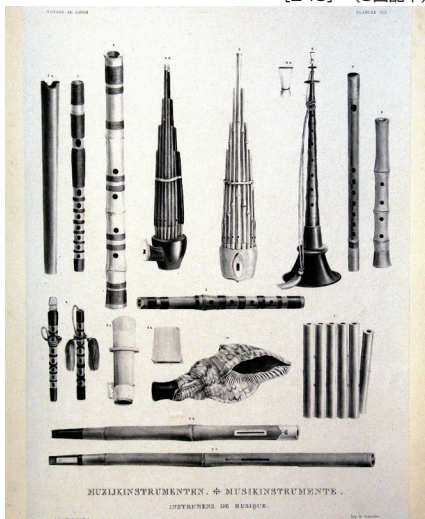
35 従者を連れした身分の高い日本人

[128] (8回配本)



35 従者を連れした身分の高い日本人

[243] (9回配本)



102 楽器

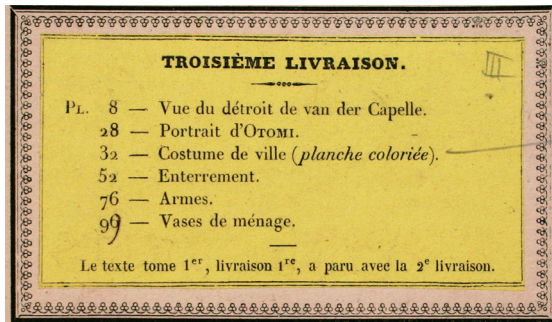
[54] (3回配本)



31 郭成章の肖像

### (3) 図版 第3分冊

第3分冊も図版数は6種類7枚が配られており、黒縮緬の紋付を着た裕福そうな町人の絵に手彩色がなされている。その色合いはドイツ語版とほぼ同じである。第3分冊の刊行時期は不明ながら、本文編第1巻についての情報が記されていることから、1838年頃と推定される。予約募集書によると、本文編は各巻の半分ずつを仮綴じて出すとあり、大英図書館の本文編第1巻の内表紙をみると、オルレアン公の援助、モンリーとフレシネの翻訳、ベルトラン社刊とあり、最下部に「M DCCC XXXVIII」(1838)とある。ここでも仮表紙の図版番号にミスがあり、「壺」の番号は99であるが、仮表紙には96と印刷されたので、手書きで修正されている。

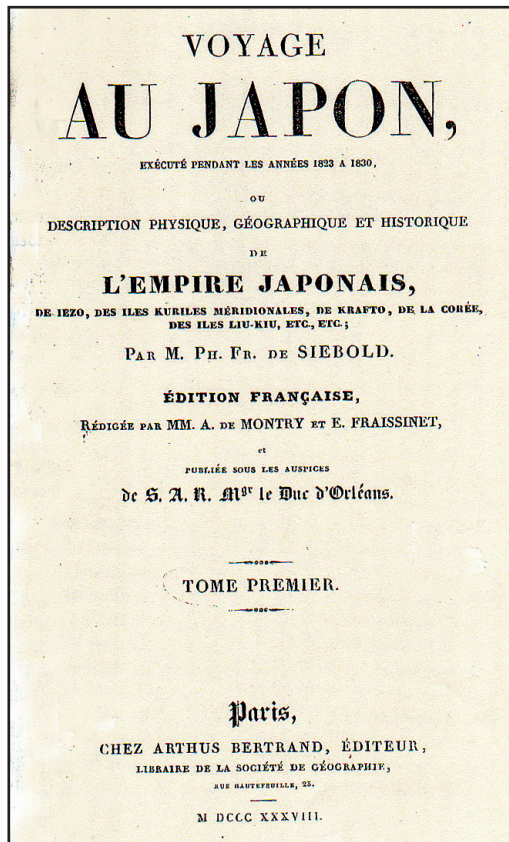


図版のタイトル

#### 【翻訳】 第3分冊

- 図版 8 — ファン・デル・カペル海峡
- 28 — おとみの肖像
- 32 — 町人の服装 (彩色図版)
- 52 — 葬列
- 76 — 武器
- 99 — 家で用いられる壺

本文編第1巻第1分冊は、図版編第2分冊とともに出版された。



『Voyage au Japon』本文編1巻内表紙  
 大英図書館蔵

[124] (8回配本)



32 町人の服装

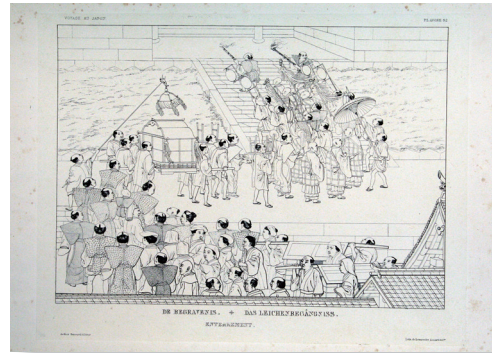


[102] (5回配本)



8 ファン・デル・カベル海峡(関門海峡)

[170] (8回配本)



52 葬列

[40] (6回配本)



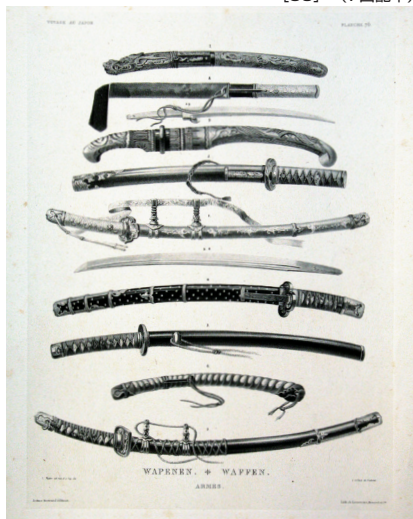
28 おとみの肖像

[124] (8回配本)



32 町人の服装

[59] (7回配本)



76 武器

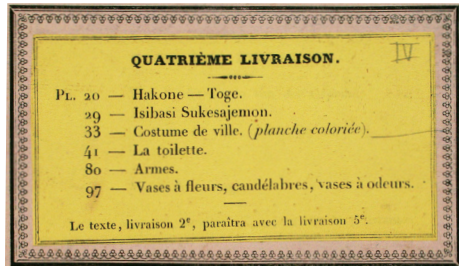
[241] (7回配本)



99 家で用いられる壺

#### (4) 図版 第4分冊

第4分冊も図版数は相互に関連のない6種類7枚であり、彩色はドイツ語版とほぼ同じである。なお、本文編第1巻の第2分冊刊行予告が付いている。



図版のタイトル

【翻訳】 第4分冊

- 図版 20 — 箱根峠  
 29 — 石橋助左衛門  
 33 — 町人の服装 (彩色図版)  
 41 — 化粧  
 80 — 武器  
 97 — 花瓶・燭台・香炉

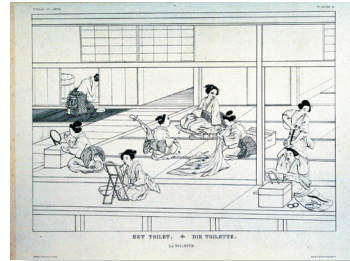
本文編第2分冊は、図版編第5分冊とともに出版される。

[20] (6回配本)



20 箱根峠

[146] (8回配本)



41 化粧

[42] (6回配本)



29 石橋助左衛門

[125] (8回配本)



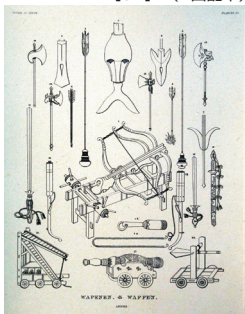
33 町人の服装

[125] (8回配本)



33 町人の服装

[62] (7回配本)



80 武器

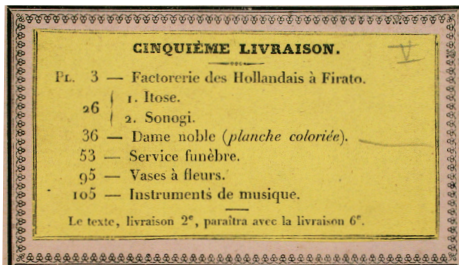
[236] (7回配本)



97 花瓶・燭台・香炉

## (5) 図版 第5分冊

第5分冊も図版数は相互に関連のない6種類7枚であり、振り袖に荒い格子縞の幅広い帯を締めた「高貴な女性」が手彩色されており、色合いはドイツ語版とほぼ同じである。なお、本文編第1巻第2分冊の刊行が延びている。



図版のタイトル

【翻訳】 第5分冊

- 図版 3 — 平戸のオランダ商館  
 26 — 1)いとせ 2)そのぎ  
 36 — 高貴な女性(彩色図版)  
 53 — 葬儀  
 95 — 花瓶  
 105 — 楽器

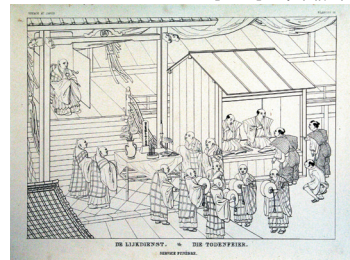
本文編第2分冊は、図版編第6分冊とともに出版される。

[5] (1回配本)



3 平戸のオランダ商館

[172] (8回配本)



53 葬儀

[41] (6回配本)



26 いとせ・そのぎ

[129] (8回配本)



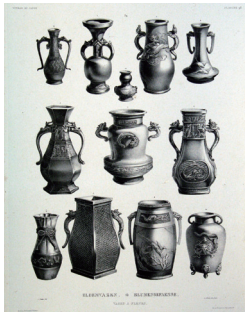
36 高貴な女性

[129] (8回配本)



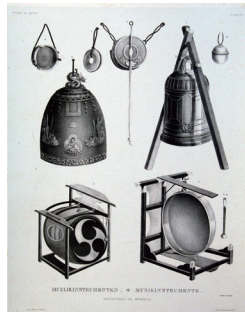
36 高貴な女性

[232] (7回配本)



95 花瓶

[246] (9回配本)

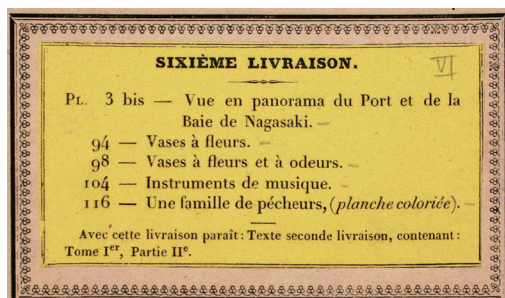


105 楽器

## (6) 図版 第6分冊

これまでは6種類7枚の図版が配られていたが、第6分冊は5種類6枚である。漂流民を描いた絵が彩色されている。出島の向かい側に対馬藩屋敷があり、そこには日本に漂着した朝鮮人たちが一時滞在していた。シーボルトは川原慶賀を伴って彼らに面会し、慶賀は囲碁をしながら休息する漂流民を描いた。図版の左下に〔Toioske Jap.pinx〕(登与助=川原慶賀)とあるが、ドイツ語版とフランス語版の石版に描かれた筆跡は異なる。筆者は先に、フランス語版は、ドイツ語版で使用された石版が再利用されたと述べたが、この絵のみは新たな石版で印刷されている。中央にある碁盤の傾きが明らかに異なっている。この絵のドイツ語版での配本は第2回配本、1833年頃の刊行である。フランス語版第6分冊は1838年以降なので、何らかの理由でドイツ語版の石版が使えなかったため、新たな石版が作成されたと考えられる。現在のところ、これのみがドイツ語版と異なる石版によって印刷されたことを確認している。

現在、シーボルト記念館には2枚の長崎港図が所蔵されており、1枚には手彩色が施されている。そして両者ともに薄い紙に印刷された後、台紙にマウントされている。この方法はフランス語版の白黒図版に特徴的な形式であり、彩色図版は薄紙を使うことなく直接に石版で印刷されて手彩色される。またこの彩色図は、シーボルト記念館において、他の『Voyage au Japon』図版(1996年購入)とは別に単品で購入されたものであり、仮表紙のタイトルにも彩色をしめす「planche coloriée」の記述はない。さらに、フランス語版の彩色図版はすべてドイツ語版でも彩色されており、ドイツ語版の長崎港図は無彩色であることなどを考慮すると、彩色された長崎港図は購入者が独自に彩色したものと考えられる。ただし、丁寧な彩色であり、ドイツ語版はすべて彩色されていないから、この1枚のみが彩色されていることになる。



図版のタイトル

### 【翻訳】 第6分冊

- 図版 3-2 —— 長崎港と湾の眺望図
- 94 —— 花瓶
- 98 —— 花瓶と香炉
- 104 —— 楽器
- 116 —— 漁師の家族(彩色図版)

この配本と一緒に本文編第2分冊を刊行。これは第1巻の第2部である。



[ドイツ語版] 337 漁師の家族  
(九大本)



116 漁師の家族

[2004年購入]

[12] (4回配本)



3-2 長崎港と湾の眺望図

[12] (4回配本)



3-2 長崎港と湾の眺望図

[337] (2回配本)



116 漁師の家族

[231] (7回配本)



94 花瓶

[237] (7回配本)



98 花瓶と香炉

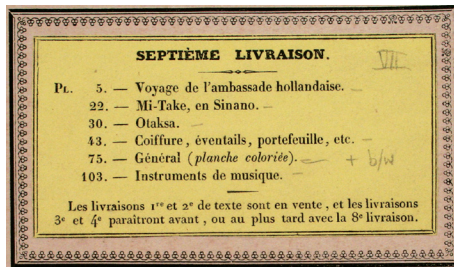
[245] (9回配本)



104 楽器

## (7) 図版 第7分冊

第7分冊は6種類7枚の図版数であり、大名か上級旗本の火事場見回りの服装を描いたと思われる絵に手彩色がある。色調はドイツ語版とほぼ同じである。



図版のタイトル

【翻訳】 第7分冊

- 図版 5 — オランダ使節の旅行  
 22 — 信濃の御岳  
 30 — おたくさ  
 41 — 髪飾・扇・財布  
 75 — 最高指揮官 (彩色図版)  
 103 — 楽器

本文編の第1・2分冊は販売中、第3・4分冊は近日中か、遅くとも図版編第8分冊とともに出版される。

[91] (5回配本)



5 オランダ使節の旅行

[20] (6回配本)



22 信濃の御岳

[76] (7回配本)



75 最高指揮官

[76] (7回配本)



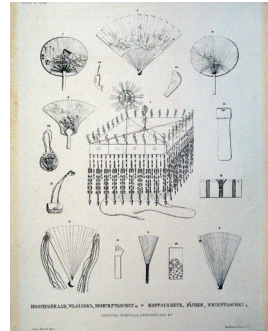
75 最高指揮官

[43] (6回配本)



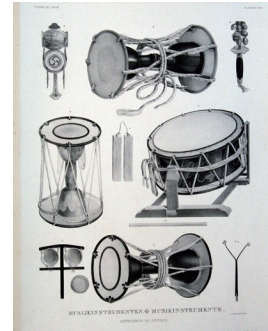
30 おたくさ

[148] (8回配本)



41 髪飾・扇・財布

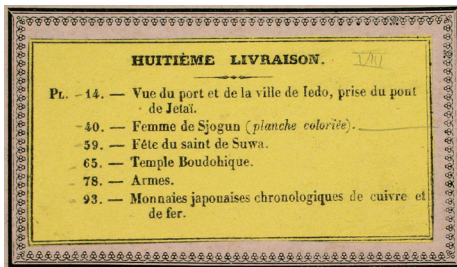
[244] (9回配本)



103 楽器

## (8) 図版 第8分冊

第8分冊は6種類7枚の図版数。彩色された将軍の御台所はドイツ語版とはほぼ同じ彩色である。これまでフランス語版はドイツ語版の第7～9回配本の図版が多く配られていたが、この分冊には11.12回配本の図版が含まれている。ドイツ語版11.12回配本は1840年代後半の配本であるから、これらの図版もドイツ語版より早く配本されたことになる。



図版のタイトル

## 【翻訳】 第8分冊

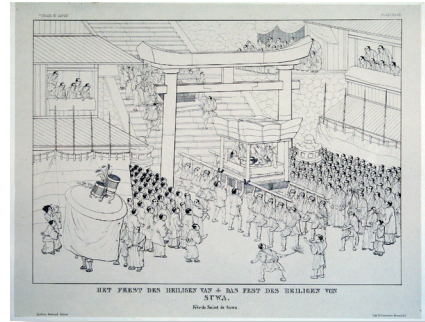
- 図版 14 —— 永代橋から望む江戸の景色  
 40 —— 将軍の御台所(彩色図版)  
 59 —— 諏訪明神のお祭  
 65 —— 仏殿  
 78 —— 武器  
 93 —— 年代順の銅貨・鉄貨

[120] (11回配本)



14 永代橋から望む江戸の景色

[185] (9回配本)



59 諏訪明神のお祭

[143] (8回配本)



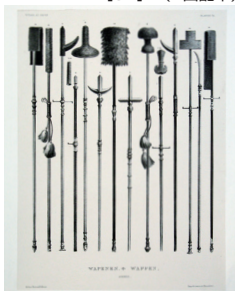
40 将軍の御台所

[191] (10回配本)



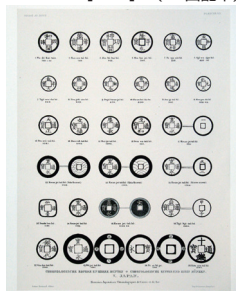
65 仏殿

[64] (7回配本)



78 武器

[227] (12回配本)



93 年代順の銅貨・鉄貨

[143] (8回配本)



40 将軍の御台所

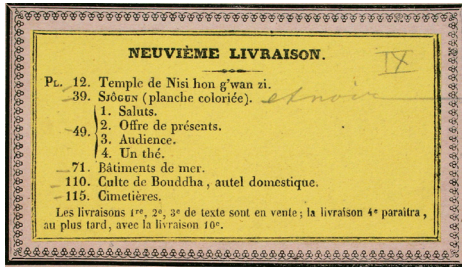
(9) 図版 第9分冊

第9分冊も6種類7枚。注記には本文編第3分冊販売中とある。本文1巻は2度に分けて刊行されており、第3分冊は本文5巻の前半を意味する。その内表紙には、「TOME CINQUIÈME」(第5巻)、「M DCCC XL」(1840)とあるから、1840年の刊行である。第9分冊にはドイツ語版13回配本、1851年刊の図版が含まれており、ドイツ語版より約10前に配本されたことになる。将軍の御台所に続き、将軍が彩色されている。色調は少しドイツ語版と異なるが、大きな相違はない。

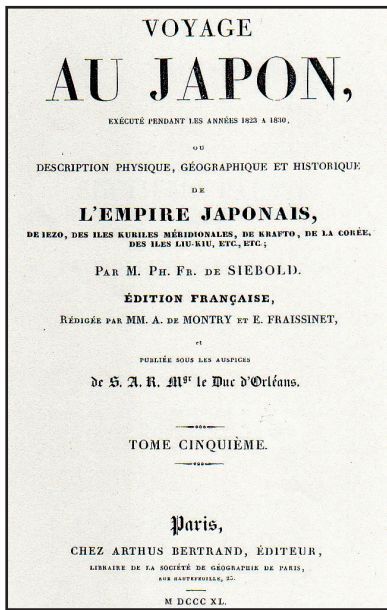
【翻訳】 第9分冊

- 図版 12 — 西本願寺
- 39 — 将軍(彩色図版)
- 49 — 挨拶・贈答・謁見・茶
- 71 — 和船
- 110 — 仏陀の崇拝・家庭の祭壇
- 115 — 墓地

本文編第1.2.3分冊は販売中、第4分冊は遅くとも図版編第10冊とともに刊行される。



図版のタイトル



本文第5巻の内表紙

[114] (11回配本)



12 西本願寺

[165] (8回配本)



49 挨拶など

[142] (8回配本)



39 将軍

[332] (13回配本)



71 和船

[142] (8回配本)



39 将軍

[312] (10回配本)



110 祭壇

[319] (10回配本)

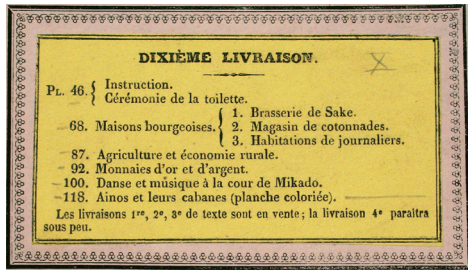


115 墓地



## (10) 図版 第10分冊

第10分冊も6種類7枚。ここでもドイツ語版13回配本で配られる図版3枚が配られている。うち1枚のアイヌ絵にドイツ語版と同じく彩色がある。アイヌ絵の右下隅の部分拡大図を比較すると、どちらも同じ石版で印刷されたことは明らかである(細部が比較できるように、ドイツ語版はチューリッヒ市立図書館蔵の初版・白黒版を掲載した)。つまり、シーボルトはすでに作成していたドイツ語版図版のなかからいくつかを選び、フランス語版用に石版を修正させ(タイトルなどの修正)刊行しているのである。



図版のタイトル

【翻訳】 第10分冊

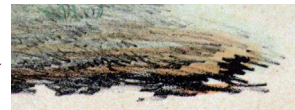
- 図版 46 — 教育・化粧の儀式  
 68 — 民家(酒屋・呉服屋・労働者宅)  
 87 — 農業と農家  
 92 — 銀貨・金貨  
 100 — 雅楽と舞  
 118 — アイヌと住居(彩色図版)

本文編第1.2.3分冊は販売中、第4分冊はまもなく刊行。

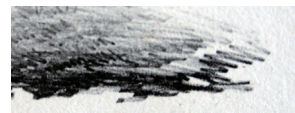
[352] (13回配本)



118 アイヌと住居



(フランス語版 拡大図)



(ドイツ語版 拡大図)

[163] (8回配本)



46 教育・化粧

[202] (13回配本)



68 民家

[323] (13回配本)



87 農業と農家

[226] (12回配本)



92 銀貨・金貨

[253] (9回配本)



100 雅楽と舞

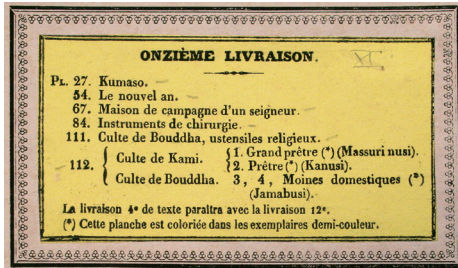
[352] (13回配本)



118 アイヌと住居

(11) 図版 第11分冊

第11分冊も6種類7枚。本文編第4分冊の刊行は延びており、まだ出ていない。彩色された神主・僧の絵をドイツ語版と比べてみても大きな相違はなく、忠実に彩色されていることが分かる。



図版のタイトル

- 【翻訳】 第11分冊  
 図版 27 — くまそ  
 34 — 新年  
 67 — 領主の邸宅  
 84 — 外科道具  
 111 — 仏教道具  
 112 — 神道・仏教(彩色図版) (\*)

本文編第4分冊は第12分冊とともに刊行。

(\*)この図版は白黒図版を彩色したもの



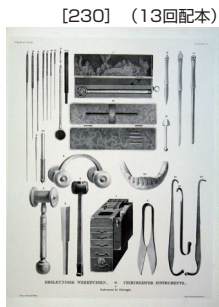
27 くまそ



67 領主の邸宅



112 神道と仏教



84 外科道具



34 新年



ドイツ語版(九大本)



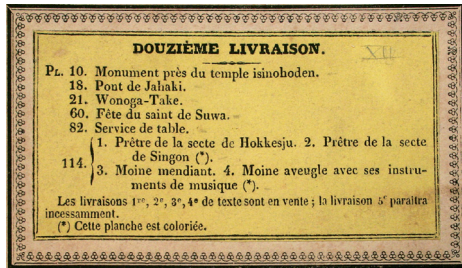
111 仏教道具



112 神道・仏教

## (12) 図版 第12分冊

第12分冊も6種類7枚。図版編は第12分冊で終了するが、本文編第4分冊はまだ出ておらず、この後に配本されている。僧侶の彩色図版は少し青色の濃さが違うが、ドイツ語版と大きな相違はない。



図版のタイトル

【翻訳】 第12分冊

図版 10 — 石の宝殿

18 — 矢矧橋

21 — 小野岳

60 — 諏訪明神の祭

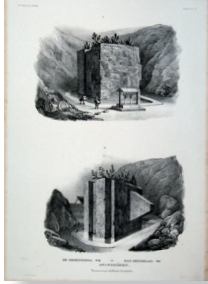
82 — 食事道具

114 — 法華宗の僧・真言宗の僧・勧進僧・楽器をもった盲僧(\*)

本文編第1.2.3分冊は販売中、第4分冊はまもなく。

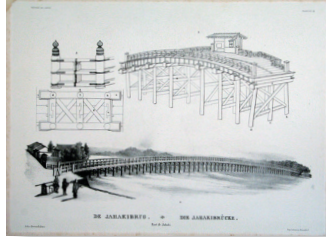
(\*)この図版は彩色

[110] (11回配本)



10 石の宝殿

[118] (11回配本)



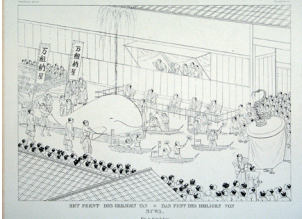
18 矢矧橋

[316] (10回配本)



114 僧

[186] (9回配本)



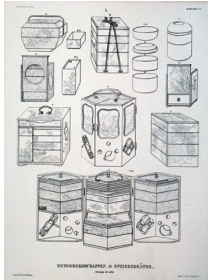
60 諏訪明神の祭

[19] (6回配本)



21 小野岳

[155] (12回配本)



82 食事道具

[316] (10回配本)



114 僧



ドイツ語版(九大本)

### 3.『Voyage au Japon』の本文と1841年の広告

ドイツ語版初版の九大本『NIPPON』に残る配本目次の「INHALT」によると、『NIPPON』の本文は以下の7章構成であった。

- 第1章 日本の数理地理と自然地理、海上旅行
- 第2章 民族と国家、陸・海の旅
- 第3章 神話と歴史
- 第4章 技術と学問
- 第5章 日本の神々
- 第6章 農業・工業・工芸および貿易
- 第7章 日本の近隣諸国と保護国

各章の本文は順次第1章から出たわけではなく、シーボルトが整理できた部分から出ている。第1回配本では1・3章の一部。第2回配本では4・7章の一部といった具合である(1)。1・5巻が出たフランス語版本文の各節タイトルを列記すると、

- 第1巻 第1節 バタヴィアから日本までの旅行
- 第2節 平戸と出島、日本におけるオランダの商館
- 第3節 通常行われている宮廷への旅行
- 第4節 1826年の長崎から江戸への旅行
- 第5節 長崎から小倉への旅行
- 第6節 長崎から大村までの旅程の地理・統計
  
- 第5巻 第1節 朝鮮人漁夫の肖像
- 第2節 日本の沿岸に難破した朝鮮人商人との面会
- 第3節 言語と文字
- 第4節 語彙
- 第5節 朝鮮の詩
- 第6節 朝鮮に関する覚書
- 第7節 韃靼国沿岸で難破して北京へ行き、そこから朝鮮を経て故郷に帰った日本の漁夫たちによる報告。日本の書物『朝鮮物語』からの抜粋。
- 第8節 朝鮮王国の制度、高官と廷臣
- 第9節 朝鮮半島史総説
- 第10節 日本の文献に基づく日本と朝鮮半島および中国との交渉
- 第11節 日本の新羅遠征の伝説(西暦200年)
- 第12節 類合、朝鮮語の訳語と朝鮮-中国方言の同等のもの【朝鮮漢字音】がつけられた中国語の語彙、J. ホフマンによる翻訳と改訂

である。これらの節がドイツ語版の何回配本に当たるのか、「INHALT」と照合すると、フランス語版第1巻第1節は4回配本。2節は1回配本。3・4節は5・6回配本。6節は8回配本となる。同じく朝鮮について記した第5巻も2・7・8回配本で配られている。つまり、フランス語版の本文編は、ドイツ語版で8回配本までに出た部分を翻訳しているのである。シーボルトは8回配本までの間に、4章の技術・学問、5章の日本の神々についての本文も出していたが、まだ一部を出したに過ぎず、まわっていなかった。

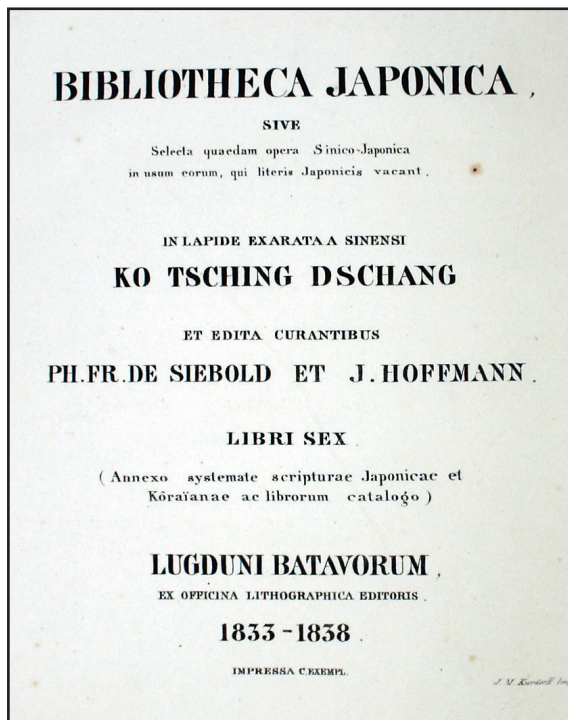
ドイツ語版8回配本の刊行時期は不明ながら、7回配本の「INHALT」に1839年10月と明記されたシーボルトの報告があるので、早くとも1840年頃である。フランス語版もこの時期に刊行されており、ドイツ語版本文のなかで、まとまっていた旅行記と朝鮮についての部分が翻訳され、『Voyage au Japon』として刊行されたのである。配られた図版をみると、本文に関係する絵のみが配られたわけではなく、ドイツ語版用として作られていた図版のなかから全般的に選ばれており、特定の分野に集中していない。そうすることがシーボルトの方針だったのだろうが、本文とあまり関係のない図版編は、異国

趣味を満足させるための図録集のようにになっている。最終的にドイツ語版『NIPPON』では、図版数367枚(うち彩色図版47枚)となるが、フランス語版では71種83枚(うち彩色図版12枚)であった。

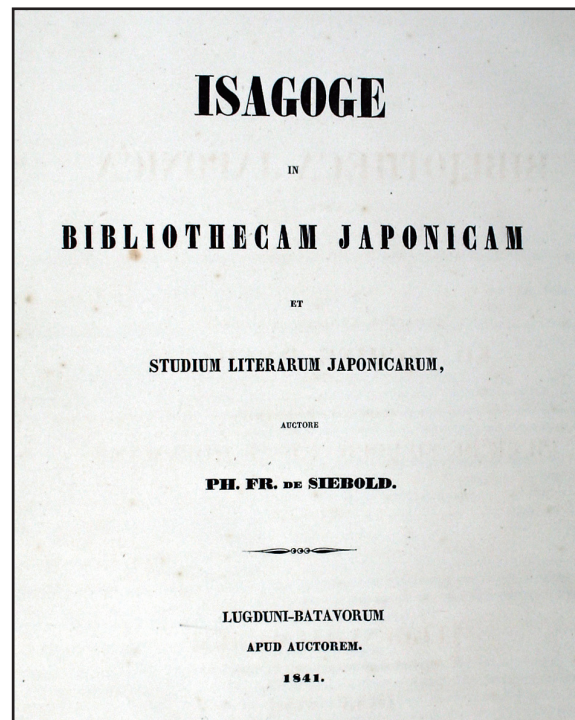
シーボルトは助手の郭成章・ホフマンの協力を得て、1833年～41年にかけて「日本叢書」と総称される6冊の辞書類をオランダのライデンで刊行した。そのなかの1冊が『和漢音訳書言字考』であり、内容説明として「表意文字の新增補珠玉、もしくは順を追って整理編集された日本語の発音の書かれた漢字コレクション」とある。要するに江戸時代の漢和辞典である。漢字の部分は郭成章が担当して石版を作成し、「1835」年の内表紙が付いている。ホフマン担当部分にも内表紙があり、「1833-1838」年とある。そして、それらをまとめてシーボルトが「1841」年の内表紙をつけて刊行した。『NIPPON』と同じく、ライデンのラ・ラウが印刷した1841年刊



郭成章の内表紙 1835年

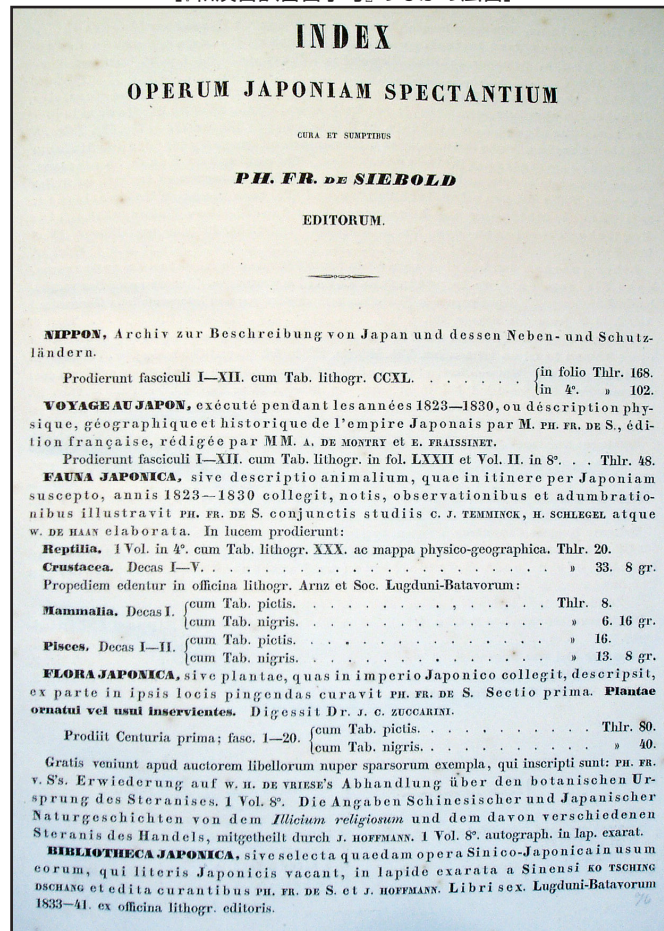


ホフマンの内表紙 1833-1838年



シーボルトの内表紙 1841年

[[和漢音訳書言字考]のなかの広告]



(ドイツ)ボフム大学図書館・長崎歴史文化博物館蔵

『和漢音訳書言字考』には、それまでに刊行した本の広告も載っている。ドイツ語版『NIPPON』の他に、『日本植物誌』(Flora Japonica)、『日本動物誌』(Fauna Japonica)があり、『Voyage au Japon』もある。

[部分拡大図]

**VOYAGE AU JAPON**, exécuté pendant les années 1823—1830, ou description physique, géographique et historique de l'empire Japonais par M. PH. FR. DE S., édition française, rédigée par MM. A. DE MONTRY et E. FRAISSINET.  
 Prodierunt fasciculi I—XII. cum Tab. lithogr. in fol. LXXII et Vol. II. in 8<sup>o</sup>. . . . . Thlr. 48.

『Voyage au Japon』の説明文を要約すると、シーボルトによる1832～30年間の日本に関する風景・地理・歴史の説明。モントリーとフレシネによる翻訳・編集。1～12分冊まで刊行。フォリオ判72枚。8折判の本文編2冊。48ターラー。

これまで検討したように、現存するフランス語版の図版編は12分冊、2折判(フォリオ)の図版数83枚であった。彩色図版12枚は同じ絵を彩色していたので、その分を差し引くと71枚となる。これは広告文にある72枚と異なるが、単純ミスと思われる。フランス語版の各分冊はほぼ6種類7枚の図版を配っていたが、第6分冊のみ1枚少なかった。このことを忘れて6×12分冊と計算した結果であろう。本文編も8折判2冊とあり、現存する本文編と合致する。したがって、『Voyage au Japon』の刊行時期は、すでに図版編2冊が販売されていた予約募集書の1837年10月から、1841年刊『和漢音訳書言字考』以前ということになる。従来、フランス語版の刊行時期は、本文編の内表紙にある年代から1838～40年とされており(2)、それほど大きな違いはない。

販売価格については、1841年までに刊行されていた『NIPPON』2折判(フォリオ)が168ターラー、『Voyage au Japon』

は48ターラーとある。最終的にドイツ語版『NIPPON』の値段は、2折判の色つき版が308ターラー、4折判の色なし廉価版が160ターラーである(3)から、部分訳の『Voyage au Japon』は『NIPPON』に比べるとはるかに安かった。なお、当時の平均的な労働者の年収は120~160ターラーであった(4)。

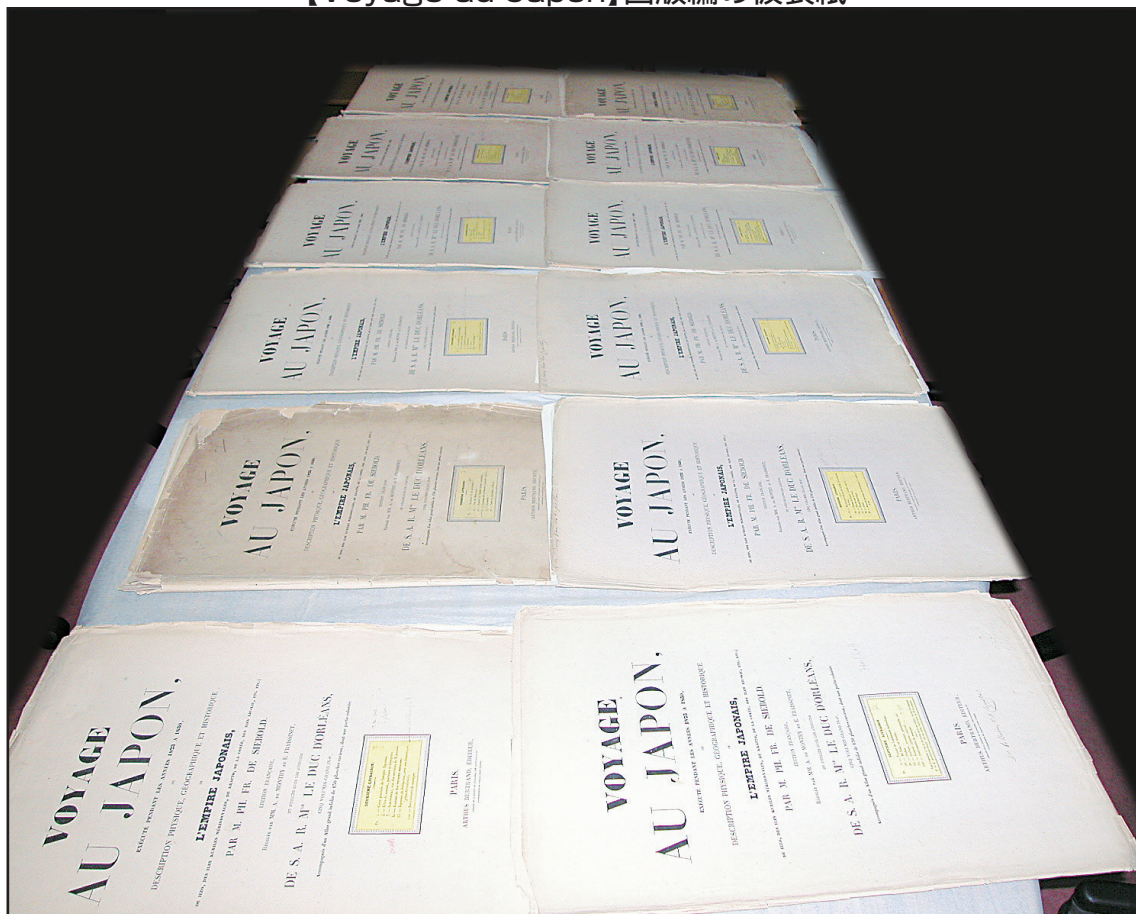
〔注〕

(1)ドイツ語版『NIPPON』の配本については、宮崎克則「復元:シーボルト『NIPPON』の配本」(九州大学総合研究博物館研究報告)3号、2005年)

(2)ハンス・ケルナー(竹内精一訳)『シーボルト父子伝』163頁、創造社、1974年

(3)(4)ヨーゼフ・クライナー「三人のシーボルト」(同氏編『黄昏のドクガワ・ジャパン』、NHKブックス、1998年)

【Voyage au Japon】図版編の仮表紙



シーボルト記念館蔵

## おわりに

「シーボルト事件」によって、いくつかの地図類は幕府に没収されたが(複製を持ち出す)、コレクション全体からみると、さほど支障はなかった。シーボルトは事件最中の1829年2月12日、オランダ・ライデン国立科学博物館長テミンクへ手紙を出した。それには(1)、

私は制限された条件のもとで自然観察や蒐集が日本の学者の伝達や協力という形で進められています。1200冊以上の日本の書物と、医家や自然愛好家から寄せられた下絵、論文などの寄贈、日本全土にいる私の弟子や友人などから送られた翻訳書・口述の報告など。これらの私の収集品のうちで、地理学に関するもの、暮らしや習慣、自然産物の日本語・中国語の名称などに関するものはすべて特別な価値のあるものです。なお日本国の刻印のあるものはさしあたり隠しておかなければなりません。厳重な注意と検閲のもとで私の原稿は送り荷の中に付加することができました。来年になれば、日本蒐集物の概観作成のために、適した興味ある対象物についての完全な抜粋をお知らせできるでしょう。

とある。シーボルトは何度にも分けて収集品を発送しており、国外追放が決定した後の1830年1月出帆のジャワ号には、植物標本・種子・鳥・魚・は虫類・甲殻類の標本12箱、生きた動物と種子22箱、生きた動物6箱、他に39箱の博物資料を積み込んでいる(2)。彼が29年2月15日、バタヴィア総督へ宛てた手紙にも「日本政府の要求は僅かしか満足させず、もっとも重要なものは犠牲にせずに守ってきた」とあるように、重要なコレクションは無事であった(3)。30年7月にオランダへ到着したシーボルトは、収集品の整理を行い、2年後の32年には『NIPPON』の第1分冊を刊行し、33年に『日本動物誌』、35年に『日本植物誌』を刊行し始める。『NIPPON』ドイツ語版では、本文とともに17~20枚ほどの図版が分冊で配られ、1830年代後半頃まではほぼ1年に1回のペースで順調に配本されていた(4)。

日本を主体に周辺地域の歴史・風俗・社会を紹介した『NIPPON』は、それまでにヨーロッパで出ていた日本関係研究書に比べると、圧倒的に図版が多く、これを購入した人々はいまだ未知の国であった日本を容易にイメージすることができたと思われる。シーボルトが自費出版で出したドイツ語版『NIPPON』は好評となり、1837年にはベルTRAN社からフランス語版が出ることとなった。フランス語版の出版には、フランス王の第1王子オルレアン公の援助があったと考えられるが、詳細は不明である。オルレアン公(1810~1842年)は音楽や文学、日本の陶磁器にも興味を持っていたが、32歳の若さで死去している。このためか、フランス語版は予約募集書の通りでなく、途中で終わっている。

以下、フランス語版の特徴をまとめると、

- 1)ドイツ語版の部分訳である。
- 2)本文の1巻・5巻は1840年頃までに出たドイツ語版のなかでまとまっていた部分を翻訳している。
- 3)図版作成にはドイツ語版で使用した石版を再利用している(一部は新調)。
- 4)ドイツ語版の13回配本(1851年)で配られる図版が、約10年前にフランス語版として配本されている(シーボルトは、図版をある程度まとめて作成したことになる)。
- 5)フランス語版の本文と図版83枚に関連性はあまりない。

今のところ、フランス人たちのエキゾティシズムを満足させたであろう『Voyage au Japon』が、どれほど売れたのか不明である。

## 〔注〕

- (1) 酒井恒・ホルサイス『シーボルトと日本動物誌』252頁、学術出版会、1990年
- (2) (3) 永積洋子「ドイツ人シーボルトとオランダ学界」(石山禎一他編『新・シーボルト研究』II、八坂書房、2003年)
- (4) 宮崎克則「復元:シーボルト『NIPPON』の配本」(『九州大学総合研究博物館研究報告』3号、2005年)